

基 調 講 演

テーマ：土木考古学

講 師：鳥取大学 教授 藤村 尚

大学院工学研究科社会基盤工学専攻 土木工学講座



略 歴

京都府生まれ（1944）、京都府立大学卒（1968）、工学博士、鳥取県防災顧問

研究活動・著書他

主に、地盤(土と岩)工学、防災工学

著書・鳥取地盤図、自己組織化マップとその応用

所属学会・日本地すべり学会、土木学会、地盤工学会、日本材料学会など

講演内容等

遺跡の大部分は土木工事によって初めて日の目を見、土木工事に伴って調査発掘がなされています。しかし、第一発見者であるにもかかわらず、土木技術者に考古学の素養がないために、これらの遺跡が持つ土木工学的価値を評価できないでいます。そのため土木技術者が破壊者のように言われています。

山陰地方では、古くは大陸とのゲートウェイであったことと開発スピードが遅かったため、大変貴重な遺跡が温存されています。山陰地方はまさに古代遺跡の宝庫です。その第一発見者ある土木技術者が考古学や古代史の知識をもち、自ら遺跡調査を行い、遺跡調査によって、古代人の街づくり、道づくり、川づくり、防災の技術を明らかにし、その知恵を学び、遺跡保存と調和のある社会基盤整備をしなければなりません。さもなければ、現在のように、あるいはもっとひどく破壊者のそしりを受けることになるでしょう。

一方、考古学では、「遺物」と「遺構」を研究対象としています。過去の間活動の場であったことが確認できる領域を「遺跡」といい、遺構とは、土地を掘ったり、盛ったり、つまり人間が大地に刻みこんだ人間活動の痕跡です。遺物は、この遺構とのかかわりにおいて、それがもつ情報を有効ならしめるものであり、したがって、考古学は大地と切り離せない学問です。しかし、土を掘ったり、盛ったり、測ったりすることの技術について、考古学の側がどれほど専門的に正しい知識をもっているかについては、はなはだ不十分であり、土木工学の知識が必要不可欠です。また、遺跡を理解するうえで、なぜそこに、遺跡があるのか、なぜその場所を選んだのか、という重要な問題について、考古学や歴史学の立場からの専門的な分析とともに、土木工学の側面からの解明が必要です。

そこで、現状の問題点について考えてみます。

- ①わが国、社会が要望している心の豊かさや文化的な、視野に立って基盤整備の技術をリードする高度な専門的土木考古研究者及びその知識をもった技術者が皆無であり、その人材を養成する大学等が見当たらない。
- ②公共事業、河川事業、道路事業などの基盤整備と埋蔵文化財、埋蔵文化財保護の仕組み、埋蔵文化財の保存と地域の活性化、調査と保存、開発と遺跡、埋蔵文化財と開発事業の仕組みなど国交省、都道府県、市町村、建設業、建設コンサルタントの土木技術者は埋蔵文化財の対応に悲鳴をあげている。
- ③日本海文化が凋落して過疎化している集落が数多く見られ、日本海地域の活性化が鈍化している。その活性化を図るため、古代史から知恵を取り入れます。たとえば、山陰道の建設など地域の開発とその時出現する貴重な遺跡との共存を念頭に地域の活性化を図る。
- ④山陰地方は古代遺跡の宝庫である。
- ⑤弥生後期の妻木晩田遺跡（鳥取県西部）や青谷上寺地（鳥取県東部）など、全国レベルで注目すべき遺跡が見つかっており、これからどうするか急務の問題である。
- ⑥弥生時代から古代においては、先進地であった山陰地方がなぜ後発地域に転化していったかを調査研究し、新世紀の地域づくりが望まれます。